

原 著

ヨハネ福音書5章29節の「悪を行った者」にも25節の希望はあるか — 5章25節のヨハネ的福音と29節のユダヤ的終末論との関係 —

古川 敬康

＜要 旨＞

5章24-25節は、ヨハネ福音書のケリュグマを記し現在の終末論を強調するが、対照的に、28-29節は、ヨハネ福音書以前のユダヤ教一初期キリスト教の未来的終末論と一致している、と言われている。この不一致を解消する努力が、R・シュナッケンブルクの法的な用語として捉える立場を踏襲し、1987年、G. R. ビーズリー＝マレイのヨハネ注解書によって提示されたが、現在も、この不一致の記述の注解書が出版されており、この不一致は今も未解決な問題である。

本論は、方法論的に、まず、この不一致はユダヤ教一初期キリスト教の文脈から未来的終末論に立つ解釈によっては解決できないことを示し、続いて、ヨハネ福音書記者の立つ文脈を尊重しつつテキストを文学的解釈学的立場から解釈することによって解決を見出す手順を取る。3章18節の「裁き」から導かれる「死」の法的概念を文学的文脈に据え、29節にいう「裁きへの復活」は、25節の示す「死者」に対する「生きる」希望を残している、と結論を結ぶ。

キーワード：実現した終末論、神の子の声、聞く、復活、裁き

I. 問題の所在

ヨハネ福音書5章25節と29節とを平行して読むと、文言上の対立に直面する。前者では、「死んだ者」で「神の子の声を聞いた者」は「生きる」とされているのに対し、後者では、「墓の中」から、「善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出てくる」とされている。即ち、25節では、復活する者の間に何の区別もなされずに「生きる」ことが述べられているにも拘わらず、29節では、「善を行った者」と「悪を行った者」との区別がなされた上で、生命は「善を行った者」にだけ言及され、「悪を行った者」には「裁き」が待っていることが述べられている。両者のテーマが異なることによるのか、という点、いずれも、終末論的な時の切迫する状況下での「生命と裁き¹」という統一したテーマを扱っている。F. J. モロニーは、「統一したテーマ

であるにも拘わらず、決定的な問題が浮び上がる。」
「外見上は相対立する終末論的視点が24-25節と28-29節とに見受けられる²。」と述べ、5章24-25節は、ヨハネ的な実現した終末論を前提としているのに対し、28-29節は、ユダヤ教の伝統的な終末論に立脚していることを指摘している。

この問題に対して、1987年、G. R. ビーズリー＝マレイは、後に詳説するように、5章の「死」を3章18節に見られる法的な範疇の死の意味として捉え、両者を統一的に解釈する立場を提唱した。しかしその後も、G. S. スローヤン『ヨハネによる福音書』（英文1988）のように、この点に一切触れない注解書が出版されていたり、G. R. オディ『ヨハネ福音書』（英文1995）のように、幾つかの説を紹介する議論に入るが、一方で5章25節の死者を霊的な意味で理解し、他方で28節の死者を肉体的な意味で理解するという結論を述べるに留まり、文言上の対立を放置している注

解書も出版されている³。言い換えれば、現在でも、ビズリー＝マレイの見解によって決着が付いたという状況にはなっていない。

本論は、25節と29節の解釈に当たり、争点となりうる諸課題に解釈上の方向性を探求し、その積み重ねから、両節の意味を明らかにする試みである。方法論的に、ヨハネ福音書記者がユダヤ教及びヨハネ福音書以前の原始キリスト教の文脈の内にいる元来の読者の前提知識として想定していることを踏まえた上で、文学的解釈学的方法論の立場から検討を行う。

II. 5章25節の「死者」

1. 5章25節の文言的内容

5章25節の記すイエスの発話の内容は、終末論的復活の時「今」である、というものである。即ち、「今」とは、「死者たち」が「神の子の声」を「聞く ἀκούουσιν」ことになっている時で、「聞いた者たち οἱ ἀκούσαντες」が「生きることになる ζήσουσιν」という、時の到来である。この出来事を惹き起こすものは、死者たちの「聞く」行為だけであり、聞く行為に決定的なことは、その対象が「神の子の声」であることである。

2. ユダヤ教及びヨハネ福音書以前の原始キリスト教の文脈の中での5章25節の意味

1) 終末論的時

第一に、5章25節にある「時が来る ἔρχεται ὥρα」という句の「時 ὥρα」と、約束の時という文脈、語法上の言い回し、及び、語義的意味の同様なものが4章21節にも見られる。いずれも、来るべき「時 ὥρα」が「今である νῦν ἐστίν」という「終末論的時 eschatologische Stunde⁴」の現在性を表現している⁵。C. K. バレットは、この2箇所(4:23, 5:25)に「未来と現在との時制に関する衝突と逆説 clash and paradox of tense⁶」を見て取る。元来、終末論的言述では未来時制が用いられるが、「歴史の終末 the end of history」が歴史の途上の只中で「今」経験されていることを明瞭に表現する手法として、ここでは、未来時制が現在時制となることを「強いられている constrained。」しかも、歴史に真の来るべき未来の「終末 end」が無くなった訳ではないので、未来時制もすべて無くなるというものではない。即ち、ここには、終末の現在性によって「約束がすでに成就されて

いる⁷」終末の現在性、及び、その成就の仕方が完全になるには、未来に何かを残している終末の未来性が存在する。

では、5章25節と、「時が来る」という同じ言い回しの表現は見られるが、「それは今である καὶ νῦν ἐστίν」という記載が欠けている28節との相違は、どのように比較し検討すべきであろうか。C. K. バレットは、この相違には、ヨハネ福音書成立に関わる事柄があると見て取る。即ち、イエスの宣教の時代の視点からは単に「時は来る the hour is coming」というものであったが、復活と五旬節の出来事後の教会生活の内に身を置く「ヨハネ自身の自然な視点 John's own natural standpoint⁸」からは、その「時」は「今」となったのである、と述べている。この見解は、相違の要因に着目して説明していると思う。

要するに、元来の読者には、28節に見られる未来的な終末論の認識しかないが、福音書記者は、ヨハネ共同体の当時の状況を反映させ、終末論的な現在性を、29節の「それは今である καὶ νῦν ἐστίν」という句で表現したように、考えられる。

2) 5章25節に見られる「聞く」ということ

「死者」が「神の子の声」を「聞く ἀκούω」と言う場合の「聞く」ことに関して、C. K. バレットは、それが、ユダヤ教の基底をなす旧約聖書に見られる「シェマー שמע」と同様な意味で用いられている、と述べている。この点は、G. キッテルやR. シュナツケンブルク等、多くの見解が一致している。即ち、この場合の「聞く」とは、「聞いて行う to hear and do」、「従う to be obedient⁹」、また、「見極め従う perceiving and obeying¹⁰」という意味であるとされている。周辺の諸宗教と異なって、ユダヤ教が「言葉の宗教」である所以は、「[神の]言葉に対する服従、即ち、行動の宗教¹¹」であることにあり、聞くことを怠ったり失敗することに対して決定的な非難がなされる。つまり、ユダヤ教の、神とその意志に聞くことの強固さの秘訣は、日々の信仰告白として「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一である יהוה יהוה אחד וישׁוּב יְהוָה אֱלֹהֵינוּ יהוה אחד」(申命記6:4以下)と心に刻む「シェマー」の使用にある。5章25節の「聞く」とは、このような「シェマー」の基本的信仰告白を念頭に置いている。そして、ヨハネ福音書の新鮮さは、R. A. カールペッパーが述べているように、その「啓示の中心場所 the locus of revelation¹²」が「律法」に代わって、「イエス」となっていることにあると言えよう。

E. ヘンヒェンは、「聞く」ことの対象である使信については、5章25節はヨハネ福音書記者が地上のイエスの使信ばかりではなく、さらにヨハネ共同体にとって明らかとなったイエスの使信をも念頭に置いて5章25節を記していることを主張し、その使信はイエスの地上の言葉に限定せず、復活の前と後のすべてを包括する、と述べている¹³。また、死者の復活をもたらすイエスの言葉に関しては、25節と直接に関連する21節を考慮に入れることで明瞭になる、と述べている。イエスが死者の復活を成しうることの根拠は、父と子（イエス）との同等性にあり（v 21）、その根拠に基づき、「神の子の声」、即ち、イエスの声を、死者が「聞く」ことによってその復活が惹起するのである（v 25）¹⁴。「死者の聞く声」とは、「創造の業」を存在せしめた「神の言葉」を「世へもたらした神の子の声」である¹⁵。

要するに、「聞く」とは「聞いて行う」服従を意味している。ユダヤ教における「聞け、イスラエルよ。」で始まるシエマーが、「聞け、神の子、イエスの声を」と置き換えられ、今や、啓示の中心場所はイエスの声である、とされている。5章25節に記されている死者の復活を惹起するものは、この声に聞くこととされている。元来の読者が特に認識を新たにすることがあることは、聞く対象の声とは、イエスの地上の宣教の言葉に限らず復活後のイエスの声を含むということであり、ヨハネ共同体にとってこの声は、父子同等性を有するイエスの声であるということである。

3) ユダヤ教信仰における「神の子」と5章25節における「神の子」

ヨハネ福音書で「神の子 *υἱὸς τοῦ θεοῦ*」という表現は、5章25節以前には、2箇所だけ（1:34, 49）に見られ、他には「神の独り子 *μόνονγενής υἱὸς τοῦ θεοῦ*」（3:18）があるだけで、決して多くはない。前後に「神」の表記が存在する場合でも、文脈上、「人の子 *υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου*」（1:51, 6:27, 13:31）を意味する場合も存在する。

「神の子」と終末論的事柄との結びつきに関しては、R. S. アンダーソンが、R. プルトマンやO. クルマン、M. ヘンゲル等の諸見解を紹介し、その上で、ヘレニズム文化では、ギリシアの神秘的英雄から皇帝アウグストに至る広範囲で「神の子 *son of god*¹⁶」を用いたが、キリスト教以前のユダヤ教では一般に見られない、と述べている。E. ローゼによると、キリスト教以前のユダヤ教においては、「神の子」が「救世

主 *the Messiah*」の標語を用いたことを支持するものは発見されていない¹⁷。B. リンダースは、「われわれが予期すべきものは、27節に見られるような、『人の子 *the Son of Man*』である。[ビザンティン型証言の内の]KSおよび他の写本は、これに応じて、訂正を行っている¹⁸。」と述べ、ヨハネ福音書では区別が明確ではなく両者は同じであるとし、「神の子」という用語の選択は、文脈上、イエスの神への関係を明確にするためになされている、と説明している。

要するに、「神の子」という用語は、元来の読者には「人の子」との区別も終末論の意味合いも希薄であり、このような背景のもとにイエスの父なる神に対する関係を示すために用いられていると考えられる。

4) 死者の復活に関する神の専属的特権への信仰と5章25節との関係

土戸清氏は、「イスラエルの思想においては、死者のよみがえり、病気の癒し、生命と健康などは一般に神に属する¹⁹」という認識があったことを指摘している。D. M. スミスは、5章25節から27節を引用し、この「神の専属的特権 *the prerogative of God*²⁰」の故に、イエスが死者に生命を与える行為は、神とイエスとの同等性を示すことから、ユダヤ人ばかりでなく「ほぼ確実に *quite possibly*」ユダヤ人キリスト者にも、「危険かつ洗神」であった、と述べている。R. H. ライトフットによると、ラビの教えでは、「反逆的な息子は『父親と自分を対等なものとする *to make himself equal with his father*』と言われていた²¹」ことを考慮すると、元来の読者の間にも、死者の復活は神だけがなし得るという限定付の唯一神信仰があったように推定できる。

これらを踏まえ、R. E. ブラウンは、永遠の生命は未来の最後の審判で人が受け取る「贈り物 *a gift*²²」であるとする共観福音書の終末論と比較し、ヨハネ福音書の終末論は、それが「現在の可能性 *a present possibility*」となっている点、さらに、神から直接の贈り物という形を取らず、「神の子」を通しての贈り物となっている点に、その刷新的な特色があるとしている。

要するに、元来の読者には、イエスによる死者の復活は、神の専権事項という観点からも、また、神による直接の復活でない点でも、前提知識になかった、と推測できる。

5) ユダヤ教の終末論的復活信仰の文脈における「死者」の復活の意味とその限界

「聞いた者たちは生きることになるοἱ ἀκούσαντες ζήσουσιν」という終末論的約束である死者の「復活」のテーマに関して、11章24節は、当時のユダヤ人の理解を、明らかにしている。まず、復活の「時」に関しては、先の4章23に登場したサマリアの女と同様に、聞き手ユダヤ人の女マルタも「最後の日ἐν τῇ ἐσχάτῃ ἡμέρᾳ」のこと、即ち、「純粹に未来のこととしてals rein zukünftig」理解していることを、直説法未来形により「甦るであろうἀναστήσεται」と表現し、完了形を用いて、このことを「私は知っているοἶδα」と記している。B. リンダースは、それは、ユダヤ社会の相当な範囲での代表的な思考を言い表していると述べ²³、S. シュルツは、その言述内容が「普及しているgängig²⁴」黙示的死者復活に関して、原始キリスト教共同体がユダヤ教から借用してきた「原始キリスト教会信仰教理問答eine Katechismusformel des urchristlichen Glaubens²⁵」と一致していると述べている。次に、復活の「意味」について、C. H. ドッドは、旧約聖書とユダヤ教に遡って、ヨハネ福音書の根源にある死後の生命の意味と「永遠の生命」の意味とを吟味し、マルタのこの言述は、5章29節と内容的に「完全にexactly」一致し、その内容が、肉体的復活である死者の甦りへの終末論的期待であった、と説明している²⁶。

これらのことから、当時の原始キリスト教共同体の終末論的期待、つまり、元来の読者のその期待は、未来に到来する肉体的な死者の復活であるように思われる。しかし、25節が、「今 νῦν」すでに、「永遠の命がすでに死んでいる者にとって得ることが可能である²⁷」時が来ていることを記しており、その期待は、この25節の内容と抵触するように思われる。

要するに、ここまで見てきたように、宗教文化的文脈であるユダヤ教とヨハネ以前の原始キリスト教の知識を前提として「死者の復活」を解釈し未来的な終末論的期待として理解する限り、この期待は、現在の終末論による「死者の復活」を語る25節と抵触し、25節の理解との調和を図ることが不可能のように思われる²⁸。この相克の解消のために、以下で、文学的解釈学的方法論によって、5章25節の「生命」の意味を検討する。

3. ヨハネ福音書テキスト上の文学的文脈における5章25節の意味

文学的解釈学的方法論により、テキスト本文の文学的文脈から5章25節の意味を検討するのは、福音書記者がそのことを念頭において記しているように思われることによる。

1) 5章25節と5章24節との文脈的關係

5章25節の文脈に関し、24節と25節との両節を単一区分とするかについて、見解が分かれる²⁹。第一に、19節以降の三人称形式の言述が、24節と25節では一人称形式の言述に変更していること、第二に、24節と25節の導入には「はっきりしておく」という平行的表現があること、第三に、内容も「死と生命」及び「聞くこと」に関するもので一致していることから、単一区分のように思われる。

2) 5章25節の前提としての5章24節の解釈：「死 θάνατος」と「生命ζωή」の意味

5章24節は、イエスの言葉を聞いて、イエスの派遣者、即ち、イエスが父と呼んでいる神を信じる者は、「死から生命へἐκ τοῦ θανάτου εἰς τὴν ζωὴν」「移ってしまっているμεταβέβηκεν」と記している。μεταβέβηκενは、現在完了形で、現在すでに死から生命へ移行している状態を意味するが、しかし、その者は未だ肉体的には一度も死んだことがないのである。従って、24節にいう「死」も「生命」も、肉体的次元では解釈できないように思われる。

非神話化を提唱したR. プルトマンは、1941年に、「『非神話化』がすでにこの福音書によって・・・遂行されている³⁰」という理解に基づき実存論的解釈をしている。「生命」を「最終決定的な(definitiv)自己理解」による「実存の本来性Eigentlichkeit der Existenz³¹」とし、対概念である「死」は、「神の現実die Wirklichkeit Gottes」に背を向けて「非現実Unwirklichkeit³²」へ陥ることである、と主張している。しかし、この主張に対しては、キリストは「最終決定的な(ultimate)自己理解」による「実存の本来性authenticity of existence」を「約束していない」という批判がなされている³³。

実現された終末論を唱えたC. H. ドッドは、1953年に出版したヨハネ注解書で、29節の文言に見られる旧約聖書とユダヤ教の伝統的な終末論的復活の観点を維持する立場から、24節の信仰者が「永遠の命を持っているἔχει ζωὴν αἰώνιον」という意味を、「懐胎的意

味a pregnant sense³⁴』という概念を用いて説明する。即ち、肉体的死後に、「単なる肉体的存在」から非時間的な「生命」へ移ることが「真の復活」であるとし、信仰者は、既に、「ここで且つ今here and now」その「永遠の生命ζωήν αἰώνιος」を「懐胎」していると主張する。しかし、この主張に対しては、それならば25節に言う「死者」を、いわば、「霊的に死んでいるbeing ‘spiritually’ dead」意味に取る解釈に陥り、「その本質的意味」に踏み込んでいないという批判がなされている³⁵。

これらの諸説に対して、R. シュナッケンブルクは、1971年出版のヨハネ注解書³⁶で、3章18節に記されている「人間はすべて神の裁きと死に服している³⁷』というヨハネ福音書の人間観の前提的命題を持ち出す。「裁き」とは、人間に有罪判決を下し死を承認するものであり、その意味で、人間が「裁きに服している」とは死んでいることをいうとするのである。この命題に照らして、5章24節には、イエスの言葉を聞いて、「御子を遣わした方を信じる者には永遠の命がある」という「本質的なヨハネ的ケリユグマthe essential Johannine kerygma」が提示されている、という。シュナッケンブルクのこの見解は、ヨハネ福音記者が法廷弁論の出来事に結びつく法廷用語を用い、且つ、完了形時制を用いることに着目し、死から生命への移行という場所の変更の完全な変化は永遠なものである、とするのである。その「死」については、ヨハネ福音書記者が二元論的に、ギリシア語において、「自然の生命ψυχή」(12:25)とは異なる「真の神授の生命ζωή」を意味する用語を用いることによって、24節の「死」とは、自然の死とは区別された死、即ち、ユダヤ教的意味での裁きによる、神から隔たり、全く破壊的で、「真の神授の生命ζωή」から、私たちが排除することであると、説明している³⁸。

E. ヘンヒェンは、1980年出版のヨハネ注解書で、地上のイエスの「時」と福音書記者の「時」との決定的な相違点が存在する、と主張する。地上のイエスの「時」から見ると、終末論的復活は、これから起きる復活(イースター)の朝の未来の事柄である。福音書記者の「時」から見ると、ユダヤ教が予期していたような切迫した宇宙論的苦難との関係はもはや無く、警告は維持されつつも、終末論的復活の時人は人間が信仰に至るまさにその時と融合し一体となっている。その時始まる「新しい生命the new life」とは、「父との交わりに入るenter into communion with the Father³⁹」ことであり、信仰による服従とし

ての愛の交わりである(14:23)。この生命を得た者は、ヨハネ共同体が直面している迫害の脅威がある状況下においても、「不安anxiety」や「安定欠如感restlessness」を克服するのである、と説明する⁴⁰。ヘンヒェンの見解は、自然の生死とは峻別するシュナッケンブルクの見解を受けて、ヨハネ福音書記者の時における共同体の状況に合致させて現在の終末論的復活を、「神との交わりに入る真の復活the true resurrection into communion with God」とするもので、一歩進んでいるように思える。

G. R. ビーズリー＝マレイは、1987年出版のヨハネ福音書注解書で、25節には24節の実現された終末論的「真理」が「投射されているprojected⁴¹』と述べている。24節の解釈に当たり、シュナッケンブルクの見解に立脚して、ヨハネ的な「生命」の特色を、説明する。即ち、裁きというものは不信仰に対するものである(3:18, 36)から、イエスの言葉を聞く者にとっては、「裁き」は自分の背後にあって自分の前には無い。その意味で、その者は「死の領域the realm of death」から「神から授かる支配者の身分the sphere of the divine sovereignty」へと移っている(12:31-32)、と説く。この説明は、ヨハネ福音書の神学全体の中心的テーマを示す1章12節とも符号するように思われる。

4. 結び：5章25節の意味

地上のイエスの活動の時点では、十字架の死の出来事は「未だ」という時であったのとは対照的に、ヨハネ共同体の時点では、ユダヤ人たちとの対立の中で、宣教の言葉を語ることが自分たちの「今」であった。その言葉が語られている「今」の時に聞き手の「聞く」行為の有無をどのように理解するかが、切羽詰まった課題であったように推測され得る。25節は、この「聞く」行為に対応する、この「今」における「生命」と「死」とを問題としているように思える。そして、ヨハネ福音書記者は、この切羽詰った終末論的「今」における「裁き」「生命」「死」をすべて法的な概念で捉え、表現している。25節にある「生命」という用語は、「死の領域」から「神から授かる支配者の身分」へ場所的に移行する法的概念として説明されている(1:12)、と思われる。

Ⅲ. 5章29節の「悪を行った者」

1. 5章28節と29節の文言的内容

ギリシア語の原文では、5章28節と29節とは一文である。「驚いてはならないμη θαυμάζετε」こととして、25節と同様に「時が来るἔρχεται ὥρα」ことが語られているが、「今であるνῦν ἐστίν」という句は欠落している。まず、28節において、ἐν ἧという具合に「時」を先行詞とする関係代名詞で表現されているその「時」には、25節のような「死者νεκροί」ではなく、「墓にいる者すべてπάντες οἱ ἐν τοῖς μνημείοις」、即ち、肉体的に死んで墓に埋葬されている者すべてが、「彼の声φωνῆς αὐτοῦ」、即ち、27節の記す「人の子」であるイエスの声を「聞くであろうἀκούσουσιν」ことが記されている。

29節には「そして出てくるであろうἐκπορεύονται」と続く。その「出てくる」動詞の主語は2つの範疇、つまり、「善を行った者たちοἱ τὰ ἀγαθὰ ποιήσαντες」と「悪を行った者たちοἱ τὰ φαῦλα πράξαντες」とに分かれる。24節のような「信じるπιστεύω」か否かを基準とするのではなく、ποιέωとπράσσωという「行為」の内容を区別の基準とする。前者は「生命の復活へεἰς ἀνάστασιν ζωῆς」、そして、後者は「裁きの復活へεἰς ἀνάστασιν κρίσεως」と、墓から出てくる。これが29節の内容である。

2. ユダヤ教とヨハネ福音書以前の原始キリスト教の文脈の中での意味

5章25節と異なり、F. J. モロニーが述べているように、28節-29節の内容は、「伝統的ユダヤ教と初期キリスト教の終末論的期待と一致⁴²」している。C. H. ドッドが述べているように⁴³、ダニエル書12章2節と詳細に比較すると類似性は顕著である。

ダニエル書12章2節では、多くの者が地中の「眠り」にあり、「目覚めるἀνίστημι。」ある者は「永遠の命へεἰς ζωὴν αἰώνιον」、ある者は「恥へεἰς ὀνειδισμόν」そして、ある者は「永遠に続く恥辱へ αἰσχύνην αἰώνιον」至る、となっている。ヨハネ25章28節-29節とダニエル書12章2節との並行的類似点は、肉体的意味での死者が「墓の中」ないし「地の中」にいること、さらに、復活が「永遠の命へ」又は「裁きへ」、「恥へ」又は「恥辱へ」至ることやこのいずれへ至るかの基準が地上での生き方によること、「今」という記述の欠落していることに見て取れるように思う。

ダニエル書と類似する5章28節-29節の記述が24節-25節の記述と異なる点は、「未来的終末論」であること、そして、「死」が実際の「肉体的死者の死」であることに見られる。とりわけ、24節-25節では、「永遠の命」、「裁かれない」、「死から命へ移っている」、「救われる」という、いずれも救いに至る内容の肯定的記述が見られるにも拘わらず、29節には、「裁きへの復活[ἀνάστασιν κρίσεως]」という、全く反対の内容となる記述が見られることは、決定的な相違点のように思われる。これらの相違は、J. リンケも指摘しているように、28節-29節が、「善を行った者」と「悪を行った者」との違いを倫理的な生活面で捉えるユダヤ教からの遺産を受け継いだことによると思われ、ここにはキリスト教的特徴が全く欠けているように思われる⁴⁴。

要するに、ユダヤ教の基盤である旧約聖書との文脈で見るとき、29節は、伝統的な終末論的二元論と一致し、まさにヨハネ福音書の福音の中心を記す25節とは内容的に相容れないという結論になると考えられる。

3. ヨハネ福音書テキスト上の文学的文脈における5章29節の「悪を行った者」の意味

文学的解釈学的立場からテキストの意味を明らかにするに当たり、改めて、5章25節と28節-29節との対応関係を原文の語順で見ると、対応関係の崩れは、25節後半部分と29節との対応関係に見られる。つまり、25節で、「聞いた者たちは、生きるであろうοἱ ἀκούσαντες ζήσουσιν」とある部分が、29節では、「出てくるであろう[ἐκπορεύονται]、善を行った者たちは命の復活へ[οἱ τὰ ἀγαθὰ ποιήσαντες εἰς ἀνάστασιν ζωῆς]、悪を行った者たちは裁きの復活へ[οἱ δὲ τὰ φαῦλα πράξαντες εἰς ἀνάστασιν κρίσεως]」とあり、対応していない。

元来、歴史的には、28節-29節の背後にある「生活の座」はユダヤ教の倫理的生活であったと推測されている通りと思うが、しかし、意味論としては、文学的文脈を変えることによって新しい意味を創造することは可能とされ、その例は、旧約聖書にも多く見られる⁴⁵。ヨハネ福音書記者が、28節-29節をキリスト教の文学的文脈の中に置くことで、新しい意味を付与しているように思われる。ピーブリー=マレイが、伝統的な倫理的範疇としての解釈を退け、3章16節-21節におけると同様に法廷用語として解釈する立場から、29節に記されている、善悪の「行い」(works)とは、「贖罪者 - 啓示者」の言葉に対する応答として

の「受け入れ」或いは「拒絶」を意味している、と主張することは⁴⁶、このような観点から賛同できるように思う。

ビーズリー＝マレイの見解によれば、5章28-29節の意味としては、生前に人の子の声を聞き信じた者たちは、墓からよみがえり、完全な形 (fullness) での復活の命を持つように召す (calling) その同じ声を再び聞く。他方、生前に一度も聞いたことのない者たちには何ら言及されていないが⁴⁷、生前に聞いても信じなかった者たちは、終末にはその声に応答しなくてはならず、そして、よみがえって、彼らに下される「有罪判決の宣告」(condemnation)の言葉を聞くことになる、と述べている。このことは、すでに聞いた者に対する奨励にも警告にもなる、とも述べる。しかし、この点は、賛同できない。テキストの原語の「κρίσις」という「裁き」を意味する用語は、シュナッケンブルクの先の説明にあるように、3章18節の示すヨハネ福音書の人間観の前提的命題を示し、「有罪判決の宣告」はすでに人間すべてに等しく為されている。その前提を踏まえると、29節の記す「善悪」の相違について、リンケが述べていることは示唆に値する。すなわち、「命ζωή」は、「終末論的ζωήの転義」(die Übertragung eschatologischer ζωή)としての「イエスの福音の受け入れ」(die Annahme der Botschaft Jesu)であり、「裁きκρίσις」は「その福音の拒絶die Ablehnung dagegen」である、と述べる⁴⁸。この見解に立つとき、24節及び25節の箇所ですでに述べたように、福音を受容した者は「受容」と同意義である「神との交わりに入る真の復活」に至り、そして、拒絶者は「拒絶」と同義である「自然の死とは区別された死の領域」からの「場所的移行のないままの復活」に至る、というように考えられると思う。即ち、死んだ時の状態のままに、各々復活する、という意味に取ることが可能なのである。

IV. 結論

ヨハネ福音書記者は、その直面している「ユダヤ人たち」との対立的状況の中で執筆している。そのため、地上のイエスが直面していた状況とは異なっており、その相違が終末論にも現れている。その相違が顕著に現れている箇所の一つが、5章24節と25節、5章28節と29節である。前者はまさにヨハネ福音書独自のものであるが、後者はユダヤ教そのものの遺産であり、

従って、両者の間には表現上の相克がある。しかし、解釈の方法論として、作品の文脈から意味を見い出すと、両者合わせて、重要な使信を「ユダヤ人たち」に提示しているのであると言えよう。

5章24節-25節も28節-29節も、3章18節をその前提的基礎内容として捉えると、元来すべての人が神の裁きの対象であるという意味において「死者」であることを前提にしている。ユダヤ人たちも「死者」である。しかし、5章25節は、待望の終末の「時が来るがそれは今」であり、「神の子の声」であるイエスの声として語られているヨハネ共同体の使信を「聞く者は生きるであろう」ことを語っている。この場合の「聞く」とは、祈りのシェマーと同様に聞いて服従し実行することを意味している。今、聞いたにも拘わらず拒絶したユダヤ人たちは、そもそも3章18節の裁きに服している状態であるから、相変わらず5章25節の法的な意味での「死者」のままであって、未来の終末の時に、その死者のままの状態、すなわち、裁きに服している者として、「裁きへの復活」として出てくることになるのである(5:29)。

結論として、5章29節の「悪を行った者」は、25節の「死者」にも含まれ、25節においてこの世で法的な意味での「死者」に対して与えられていると同様に、「神の子の声」を「聞く」ことによって「生きる」希望が残されている、と考える。

脚注

- 1 Francis J. Moloney, *Signs and Shadow: Reading John 5-12* (Minneapolis: Fortress Press, 1996), p. 10.
- 2 Ibid., p. 11.
- 3 G. S. スローヤン『ヨハネによる福音書』、現代聖書注解、鈴木脩平訳、日本基督教団出版局、1992年、158頁、及び、G.R. オディ『ヨハネ福音書』、NIB新約聖書注解5、田中和恵、田中直美訳、ATD・NTD聖書注解刊行会、2009年、122-123頁。
- 4 Rudolf Bultmann, *Das Evangelium des Johannes*, Göttingen 21, 1986, S. 194. 『ヨハネ福音書』、杉原助訳、日本基督教団出版局、2005年、212頁。
- 5 同旨は、Siegfried Schulz, *Das Evangelium nach Johannes*, NTD II (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1982), S.76, 90, 『ヨハネによる福音書』、NTD新約聖書註解(4)、松田伊作訳、NTD新約聖書註解刊行会、1975年138、165-167頁。シュルツも、4

- 章21節と5章25節ともに終末論的な時に関するものとする。
- 6 C. K. Barrett, *The Gospel according to St John* (London: S.P.C.K, 1960), p. 56.
- 7 Ibid., p. 57.
- 8 Ibid., p. 56.
- 9 Ibid., p. 217.
- 10 Rudolf Schnackenburg, *The Gospel according to St John*, vol.2, trans. C. Hastings et al. (New York: Crossroad, 1987), p. 111.
- 11 Gerhard Kittel, “ἀκούω, et al.,” in *TDNT*, vol. I (Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans, 1964; rept., 1981), p. 218.
- 12 R. A. Culpepper, *Anatomy of the Fourth Gospel: A Study in Literary Design* (Philadelphia: Fortress Press, 1983; 2nd repr. 1988), p. 91. 『ヨハネ福音書文学的解剖』、伊東寿泰訳、日本キリスト教団出版局、2005年、131頁。
- 13 Ernst Haenchen, *John*, vol.1, Hermeneia, trans. Robert W. Funk (Philadelphia: Fortress Press, 1984), p. 252.
- 14 Ibid., p. 251.
- 15 Schnackenburg, *The Gospel according to St John*, p. 111.
- 16 R. S. Anderson, “Son of God,” in *The International Standard Bible Encyclopedia*, vol. 4, ed. Geoffrey W. Bromiley (Grand Rapids: W. B. Eerdmans, 1988), p. 572.
- 17 Eduard Lohse, “υἱός, υἱοθεσία: II. Palestinian Judaism” in *TDNT*, vol. VIII, trans. G. W. Bromiley (Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans, 1972), p. 361.
- 18 Barnabas Lindars, *The Gospel of John*, The New Century Bible Commentary (Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans, 1972; repr., 1987), p. 225.
- 19 土戸清『ヨハネ福音書研究 - 「人の子」句を含む記事単元の伝承批判的・編集史的研究』、創文社、1994年、44頁。列王記下5:7等参照。
- 20 D. Moody Smith, *Johannine Christianity: Essays on Its Setting, Sources, and Theology* (Columbia: University of South Carolina Press, 1984), p. 206.
- 21 R. H. Lightfoot, *St. John's Gospel*, ed. C. F. Evans (Oxford: Oxford University Press, 1956), p. 149.
- 22 Raymond E. Brown, *The Community of the Beloved Disciple: The Life, Loves, and Hates of an Individual Church in New Testament Times* (New York: Paulist Press, 1979), p. 51.
- 23 Lindars, *The Gospel of John*, p. 395.
- 24 Schulz, *Das Evangelium nach Johannes*, S.158, 『ヨハネによる福音書』、298頁。
- 25 A.a.O., S.158. 『ヨハネによる福音書』、298頁は、「原始キリスト教信仰の・・・教理問答定式」と訳している。
- 26 C. H. Dodd, *The Interpretation of the Forth Gospel* (Cambridge: Cambridge University Press, 1953; repr., 1968), p. 147.
- 27 Gary M. Burge, *The Anointed Community: The Holy Spirit in the Johannine Tradition* (Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans, 1987), p. 192.
- 28 E. ケーゼマン『イエスの最後の意志—ヨハネ福音書とグノーシス主義』、善野碩之助、大貫隆訳、ヨルダン社、1978年、49頁。
- 29 R. プルトマン、C. H. ドッド、R. E. ブラウン、R. シュナッケンブルク、G. R. ビーズリー=マレイ、土戸清氏、大貫隆氏、G. R. オディ、F. J. モロニー、R. カイザー等多数。両節を分断する異なる見解として、D. M. スミス、B. リンダース等。特に、リンダースは、19-23節への「付け足しafterthought」であると述べている (Lindars, *The Gospel of John*, p. 223)。
- 30 大貫隆『ロゴスとソフィア - ヨハネ福音書からグノーシスと初期教父への道』、教文館、2001年、57頁。
- 31 Bultmann, *Das Evangelium des Johannes*, S. 194. 『ヨハネ福音書』、212頁。
- 32 Rudolf Bultmann, *Theologie des Neuen Testaments*, 2. Aufl. (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1954), S. 366.
- 33 Schnackenburg, *The Gospel according to St John*, p. 112.
- 34 Dodd, *The Interpretation of the Forth Gospel*, p. 148.
- 35 Schnackenburg, *The Gospel according to St John*, p. 112.
- 36 Ibid.
- 37 Ibid., p. 110.
- 38 Ibid., pp. 119-110.
- 39 Haenchen, *John*, vol.2, p. 252.
- 40 Ibid., p. 127.
- 41 George R. Beasley - Murray, *John*, Word Biblical Commentary 36 (Waco, TX: Word Books, 1987), 76.
- 42 Moloney, *Signs and Shadow*, p. 17.
- 43 Dodd, *The Interpretation of the Forth Gospel*, p. 147.
- 44 Johannes Rinke, *Kerygma und Autopsie: Der christologische Disput als Spiegel johanneischer Gemeindeggeschichte*, Freiburg Herder, 1997, S. 152 -

153.
 45 一例を挙げると、アモス書3:2では、元来、「万軍の主」はイスラエルに勝利をもたらせる神の名である。そのような「生活の座」がこの神名の背後にはある。ところが、ここの文脈では、イスラエルの敵ではなくイスラエルそのものを罰するために来ると預言しているのである。
 46 Beasley-Murray, *John*, p. 77.
 47 Ibid.
 48 Rinke, *Kerygma und Autopsie*, S. 154.

参考文献

- Anderson, R. S. "Son of God." In *The International Standard Bible Encyclopedia*. Vol. 4. Ed. Geoffrey W. Bromiley. Grand Rapids: W. B. Eerdmans, 1988.
 Barrett, C. K. *The Gospel according to St John*. London: S.P.C.K., 1960.
 Beasley - Murray, George R. *John*. Word Biblical Commentary 36. Waco, TX: Word Books, 1987.
 Brown, Raymond E. *The Community of the Beloved Disciple: The Life, Loves, and Hates of an Individual Church in New Testament Times*. New York: Paulist Press, 1979.
 Bultmann, Rudolf. *Das Evangelium des Johannes*. Göttingen21, 1986.
 ——— 『ヨハネ福音書』、杉原助訳、日本基督教団出版局、2005年。
 Burge, Gary M. *The Anointec Community: The Holy Spirit in the Johannine Tradition*. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans, 1987.
 Culpepper, R. A. *Anatomy of the Fourth Gospel: A Study in Literary Design*. Philadelphia: Fortress Press, 1983; 2nd repr. 1988.
 ——— 『ヨハネ福音書文学的解剖』、伊東寿泰訳、日本キリスト教団出版局、2005年。
 Dodd, C. H. *The Interpretation of the Forth Gospel*. Cambridge: Cambridge University Press, 1953; repr., 1968.
 ケーゼマン、E. 『イエスの最後の意志—ヨハネ福音書とグノーシス主義』、善野碩之助、大貫隆訳、ヨルダン社、1978年。
 Kittel, Gerhard. "ἀκούω, et al." In *TDNT*. Vol. I. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans, 1964; repr., 1981.
 Lightfoot, R. H. *St. John's Gospel*. Ed. C. F. Evans. Oxford: Oxford University Press, 1956.
 Lindars, Barnabas. *The Gospel of John*. The New Century Bible Commentary. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans, 1972; repr., 1987.
 Lohse, Eduard. "υἱός, υἰοθεσία: II. Palestinian Judaism." In *TDNT*. Vol. VIII. Trans. G. W. Bromiley. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans, 1972.
 Moloney, Francis J. *Signs and Shadow: Reading john 5-12*. Minneapolis: Fortress Press, 1996.
 オデイ、G.R. 『ヨハネ福音書』、NIB新約聖書注解5、田中和恵、田中直美訳、ATD・NTD聖書註解刊行会、2009年。
 Rinke, Johannes. *Kerygma und Autopsie: Der christologische Disput als Spiegel johanneischer Gemeindegeschichte*. Freiburg Herder, 1997.
 Schnackenburg, Rudolf. *The Gospel according to St John*. Vol.2. Trans. C. Hastings et al. New York: Crossroad, 1987.
 Schulz, Siegfried. *Das Evangelium nach Johannes*. NTD II. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1982.
 ——— 『ヨハネによる福音書』、NTD新約聖書註解(4)、松田伊作訳、NTD新約聖書註解刊行会、1975年。
 スローヤン、G. S. 『ヨハネによる福音書』、現代聖書注解、鈴木脩平訳、日本基督教団出版局、1992年。
 Smith, D. Moody. *Johannine Christianity: Essays on Its Setting, Sources, and Theology*. Columbia: University of South Carolina Press, 1984.
 土戸清 『ヨハネ福音書研究 - 「人の子」句を含む記事単元の伝承批判的・編集史的研究』、創文社、1994年。

Do “Those Who Have Done Evil” in John 5:29 Have Hope Described in v. 25?: Does the Johannine Kerygma in 5:25 Affect the Jewish Eschatology in v. 29?

Takayasu Furukawa

<Abstract>

Despite the unity of theme, conflicting eschatological perspectives appear in 5:24-25 and 5:28-29. Whereas 5: 24-25 presuppose a Johannine realized eschatology, 5: 28-29 resort to a Jewish traditional end-time eschatology. Based on R. Schnackenburg’s understanding of the dead in 5:25 in a legal sense, G. R. Beasley-Murray offered a solution to solve this incongruity in his Johannine commentary published in 1987. Some commentaries published since then still have descriptions of this incongruity and others leave the issue untouched; thus, this issue still remains and is not solved yet. Methodologically, first, this paper presents the interpretative problems that the original readers might have faced based on their Jewish traditional way of understanding the Johannine terms. Then, this paper moves to a literary interpretation of the text and concludes that “those who have done evil” in 5:29 will equally be given hope for life as the dead in 5:25 are given.

Key words: realized eschatology, the voice of the Son of God, hear, resurrection, judgment